

# 片山タイムズ

第十一号

令和五年  
五月吉日

## お稽古での楽しみ

毎回のお稽古でお楽しみが「菓子」という方はいらっしゃるのではないのでしょうか。お稽古では「ほりい」さんや「紅屋 紅粉屋久右衛門」さんのお菓子や、京都をはじめ全国各地の銘菓をお土産にいただいたり買求めたりして、お稽古でも楽しんでいただけるようにしています。その「お菓子」ももとは「菓子」と古代には書かれていました。みでの通り果実のことです。日本の文献ではじめてみられるのが、諸説あるが「古事記」かと思えます。

古事記では「垂仁天皇の命をうけて田道間守（たじまもり）が非時香菓（ときじくのかがのみ）を持ち帰るが、すでに天皇はなくなっていた」という記述があります。この実が「橘（みか）（みか）」といわれます。この田道間守を菓子神・果祖として信仰をあつめ、現在でも「中嶋神社」の例祭には多くの菓子業者が参拝されるといわれています。日本最古のお菓子は「橘みか（みか）」という今でいうフルーツになりますね。



田道間守

このような神話の時代に「茶」は日本には無く、今となっては茶と菓子とは切り離せないものですが、過去は全く関係ないものだったかも知れません。しかし、四ヶ伝になると三種以上で水菓子（フルーツ）がでてくるのはおもしろいですね。

日本は古来より果実を珍重し、災厄から逃れる貴いものとして認識されていたように思われます。古事記・日本書紀では「伊邪那岐」が黄泉の国から逃げかえるときに貢献したのが「桃」です。また近畿地方の最大級の遺跡「纏向遺跡」からは桃の種が大量に発掘されています。また「続日本記」では葛城王が貢献した結果臣下に降りる際「橘」の性を与えられています。

## 懐石料理

以前NHKの永遠の3歳児のちこちゃん司会している番組を視聴していると、「懐石料理の石つてなに」というような内容が放送されていました。チコちゃんへの答えは、お坊さんのお腹を温めた石、で会席料理は江戸時代に武士たちが宴会の席で酒を楽しまつために提供された料理の事とありました。いろいろ通説がありますが、神津朝夫さんがかかれていた「茶の湯と日本文化」にはこのように書かれています。

“茶の湯についてはいろいろな見方ができますが、日本で形成された飲食儀礼のひとつであることはたしかです。つまり、料理を食べ、茶を飲むことを内容とする会合の形式や作法をととのえ、そこに独自の価値観や意味づけ（思想）を与えたものといえるでしょう。そこで、まず茶会の内容をなす飲食の食文化から本書をはじめることになりました。茶会（今の茶事）で出される順番で、料理・酒・菓子、茶の順に話を進めます。

なお、茶会（今の茶事）で出される料理を現在は懐石料理と呼びますが、これは会席料理の書き換えとして近代になって広まった用字です。しかも、会席・懐石ともに限定された狭い意味でつかわれるため誤解されやすい用語となっている（以下略）”

「茶の湯と日本文化」より引用  
このように、懐石は会席料理の文字を近代に置き換えることとされています。また後段には一汁三菜は室町時代の正式料理がもととなっているのは過ちで、平安時代からすでに一汁三菜が定着していたと絵巻物からひも解いています。ではなぜ正式料理に一汁三菜の起源を求めたかというのは室町時代に茶の湯が生まれたのと整合性をとるためとされています。  
今の日本料理は懐石（茶会料理）から発達したものだと言われていますが、その根拠は極めて薄弱と書いています。そして、（懐石・茶会料理）を寺院食と考える必要はなく庶民にとって常識的・合理的な方法であり、茶会料理は京都・奈良・堺などの町人たちの中で形成された日常の食事だとされています。

## 又玄斎一燈宗室

表千家から迎えた、7代最々斎三叟宗室が早世してしまつた為、表千家各覚々斎の三男が裏千家の養子となり15歳で裏千家を継承します。数代にわたって、裏千家の家元が早世し志半ばということが続いてしまいましたが、この又玄斎一燈宗室が裏千家だけでなく三千家の中興の祖といわれるように、大活躍をします。

1758年に行われた「宗旦百年忌」では又玄斎一燈宗室が一族を大乗して取り仕切ります。このころになると、タイムズの昨年10月号にあるように、町人文化が花開き茶道人口が拡大します。茶事や茶会より点前やお稽古古することが目的となります。この辺りは現在も同じですね。お稽古を变化のあるもの緊張感があるものを求められ、兄の如心斎と共に考えだされたのが七事式です。決して札での遊びではなく、禅の精神に基づいた稽古であることは、以前のタイムズでも書きましたし、先日静岡支部の研究会でも奈良業林先生もおっしゃっていました。この七事式により世間により広く茶の湯が広がり、また茶の湯といえは三千家という認知も知れ渡りました。

そして、裏千家の新しい基軸を七事式というかたちでつくり後世に大きく影響を与えたのは間違いないことでしょう。

## 老松

お稽古で「蓋の開け閉めが不安定」と「なぜ老松というのか」という声をよく聞きます。蓋の開け閉めはお稽古でしっかりと体覚えていただくしかありません。そしてなぜ「老松」というか。これは老松でつくったからというべきでしょう。

1582年に織田信長が本能寺で撃たれると、豊臣秀吉と明智光秀との間で、山崎の戦いが行われました。皆様ご存じのようにこの戦いで勝利した秀吉が天下人になります。

また、この戦いで陣中に作られた、二畳隅炬の茶室が現在国宝の待庵です。その待庵があるのが妙喜庵というお寺になります。  
ここに、秀吉の袖が触れたという「袖摺りの松」という松がありました。しかし江戸中期に松が枯れてしまい、その松を使って、又玄斎一燈宗室の父表千家六代 覚々斎原叟宗左（かくかくさいげんそうそうさ）が作ったのが老松です。  
宗旦の湯飲みをモチーフに、また黄瀬戸の器をモチーフにされたとの説もあります。それを子の又玄斎一燈宗室もお好みとしました。

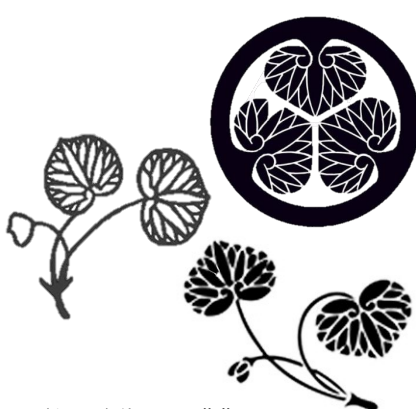
## 五月の京都

この時期京都市内には「葵祭」一色になります。京都三大祭りの一つになります。祇園祭が庶民のお祭りだとすると、葵祭は貴族のお祭りといえるでしょう。正式名称は「加茂祭」で上賀茂神社と下鴨神社の例祭です。

坐忘斎御家元の長女千乃紀子様が平成21年に齋王代をつとめたこともあり、平安時代から1400年以上に続く雅なお祭りです。

## 葵といえ

今年の大河「どうする家康」の徳川家の家紋が言わずと知れた、三つ葉葵です。葵つながり、徳川家は「葵祭」を大庇護したといわれています。そして上賀茂神社から天下泰平なることを願って行った行事が「葵使い」です。慶長15年（1610年）から260年にわたっておこなわれました。上賀茂神社で自生した「二葉葵」を駿府城まで届けます。現在では四月の静岡まつりに奉納するようプロジェクトが行われています。私たちが住む静岡と京都のつながりです。



(上から) 徳川三つ葉葵、上賀茂神社二葉葵、下鴨神社二葉葵



老松